

連用形の意味と修辭的效果をめぐつて

— 國語教育とのつながりから —

森 山 卓 郎

一 はじめに

本稿では、詩、短歌、俳句といった文學的表現における連用形の修辭的效果について國語教育とのつながりから考えてみたい。連用形とは、いうまでもなく、學校文法において、「ます」「たい」や「て」「た」などが付く形である。ただし、音便があり、「て」「た」がつく場合には語幹の最後の子音の性質によつて連用形の形は変わる（「い」(k)、「つ」(trw)、「ん」(m n) という形¹）。

ここでは連用形に「て」がついた形も連用形に類するものとして扱う。これは、獨立的に使う場合、

花が咲き、やがて枯れる。

花が咲いて、やがて枯れる。

のように、次に続く形としてどちらの形も使われるからである。以下、本稿では「て」がある場合も含んで連用形と呼ぶことにし、必要があれば、「て」がない場合に「狹義連用形」「狹義連用形＋て」だけを指す場合に、テ形とそれぞれ呼び

分けることにする。

二 連用形の基本的な働き

(一) 非獨立的用法と命令用法

連用形の特性とは、言うまでもなく、述語が続く形ということである。これは様々な機能につながっている。

最初に非獨立的な用法について触れておきたい。すなわち、語構成的に複合動詞を形成するのは、

よび＋かける・こむ・入れる・・・

のように、狹義連用形である。また、

考えて＋いる・みる・おく・もらう・・・

といった様々な補助動詞成分が接続するのはテ形の連用形である。なお、ここから、「くくれる」「く頂戴」という形に続く形を経て、

早くして。

のようにテ形による命令表現ができてゐる。同じく、「お+

動詞の狭義連用形」による、

早くお食べ。

のような指示的命令表現があるが、関西方言では、尊敬形式の「お」なしで、

早く食べ。

のような命令文が構成できる。いずれも、「狭義連用形＋なさい」の「なさい」が落ちた形と想定され、目上には言いにくいなどの特性がある。これは連用形命令と呼ばれるような、連用形が命令を表すという興味深い特性である。活用に関する指導をする場合、関西方言の地域では命令形が命令を表すということはもちろんではあるが、日常会話では連用形もまた命令を表すことがあるということに注意しなければならぬ。大きく見れば、この連用形命令は、ともすればぞんざいになる命令形を回避する形で日常会話で多用されるからである。

(二) 修飾関係

次に、独立的な成分が後続する場合に考えられるのが、修飾関係である。すなわち、

太郎が歩いて川を渡る

のような修飾的な表現は、動詞句レベルの成分(南(一九七四)のA段階)で副詞相当の表現として後続する述語を修飾する。これは「太郎が歩く＋太郎が川を渡る」というように同一の主体が伴う動きをテ形で示すことになっている点で、付帯的事情という呼び方で呼ばれることがある。ただし、形容詞の場合には、テ形ではなく、

太郎が紙を速く丸く切り取る

のように動きの形態や結果は狭義連用形で示される。形容詞の場合は、この例では「太郎の切り方」速く」のように主体の形態を表すだけでなく、「紙」丸く」のように、対象の変換結果の形態を表すこともできる。動詞の場合には同一主体の動きを表すことに限定されるのに対して、形容詞の場合には動きの形態を全般的に修飾することができ、そこから対象の結果の状態も示すことができるのだと考えられる。

(三) 並列関係

さらに、同様の述語が続く形として挙げられるのが次のような並列構造である。

丸く大きな月

歌って踊った。

ちなみに、国語教育とのかかりとして、古典語では、

「かげらふの夕を待ち夏の蟬の春秋を知ら」ぬもあるぞ

かし（徒然草・七段）

のような否定の助動詞を共有した連用形並列があったことや、

「殿上人まゐりて、お遊びせさせたまひや、もてなしかしづき申す」人などもなく、（『大鏡』師尹）

のように並列構造の連用形に「や」がつくこと、連体修飾でも連用形並列の構造があることなどに注意が必要である。

現代語では、

「飲み、（そして）歌お」う。

「飲み、（そして）歌」え。（活用形態上は「歌え」だが、命令の意味を対応させるために括弧の位置はずらしてある）

「飲み、（そして）歌え」ば、楽しくなる。

のように言え、モーターな意味や接続関係などを共有する並列構造を作ることができるが、

* 「飲み、（そして）歌わ」ない

* 「飲み、（そして）歌う」人たち（「飲む人たち、そして、歌う人たち、の意」）

とは言えず、否定や連体関係をまたぐ形での並列や、「や」のような助詞を挟む並列構造もないという点に注意が必要である。連用形における述語としての述べ立ての機能が現代語の方がより明確化してきていると言えそうである。

こうした並列構造は、いわゆる矛盾語法と呼ばれる修辭にも関わっている。森山・矢澤・安部2011にも述べたことであるが、矛盾する属性を融合することが連用形の場合には可能である。例えば、連体修飾では、

* 甘いほろ苦い思ひ出

とはならない。連体修飾で直接修飾すればある属性の「場」としては一つのスロットしかないことになり、「思ひ出」の「味」での比喩的な描写が「甘い」のか「ほろ苦い」のかで矛盾してしまうのである。これに対して、

甘くほろ苦い思ひ出

という形は並列関係が構成され、「甘く、それでいて、ほろ苦い」という意味になり、「甘さ」とほろ苦さ」という矛盾する性質であつても並列的に融合した属性となる。「遠くて近い国」のような矛盾語法が可能なのは、こうした並列構造ができるからである。

さて、広義の並列構造には、節レベルで主語をもつ場合が

あり、「は」などの独立性の強い助詞も含むことができる。

雨は降り、風は吹き、波は荒れ狂った。

のように「は」を含む場合は、事態の同時的な状況を表すことができる。狭義の並列構造とは、

出費は多く、収入は少ない。

のように、内容的に対になるもので、構造的に独立度は同じであり、基本的に述語の性質が同一の場合である。なお、これに連続して、

太郎君が来て、次郎君が行った。

のように主語が「が」で導かれ、述語が動きを表す場合、継起的な連続を示すことになるが、これは次に述べる。

(四) 継起関係と因果関係

連用形による動きの連続は、継起的関係を表す。特に何らかの因果関係が読み込める場合、その継起関係が因果関係の含意を持つ解釈がなされることもある。例えば、

太郎君が来て、座がにぎやかになった。

の場合、単なる事態の継起的な連続から一歩進んで、因果関係的な含意を持つようになっている。ただし含意であって、キャンセルすることはでき、

太郎君が来て、座がにぎやかになった。が、この二つの出来事は関係がない。

のように言うことはできる。従って、テ形による因果関係は強く指定されるものではない。

難しい用語が多く(て)、よく理解できなかった。

難しい用語が多いので、よく理解できなかった。

では、「ので」の方がより明確に因果関係を表す。

以上、連用形の基本的特性について国語教育上注意すべきことを簡単に見てきた。連用形は後に用言すなわち述語が続く形であるが、小さいところでは補助動詞など付属的な成分を伴う様々な表現が連用形という形によって成立し、それが連用形命令の機能にまで拡張している。さらに、狭い意味での「修飾」から、並列構造や継起的関係や因果関係の接続といった機能ももっている。以下、この連用形による修辞について見ていきたい。

三 連用形終結

連用形のいわば「続く」という機能は文学的な表現に利用されることが多い。まず、取り上げたいのは連用形による終

結である。平叙文のモダリティを持つ文が連用形によって終止することを連用形終結と呼ぶことにしたい。例えば

あをあをと空を残して蝶別れ 大野林火

という俳句において、「蝶別れ」というのは、連用形による終結である。「蝶別る」といった終止形での終結とは違った表現効果を持っている。

この連用形の場合、節を構成して、後に文が続くという、広い意味での連続・並列用法と認定できる。そのため、次に何かが続くような含みができる。これは、一連の動きの中の一つの動きという位置づけが与えられるということでもある。これを事態の一部分化と呼ぶこととしたい。「蝶別れ」という事態そのものは、「まだ次に何かがある」という後続部分の存在の暗示によって、全体状況の中で一部分化されるのである。

この事態の一部分化は、ある種の脱焦点化にもつながる。この例で「蝶別る」というように終止形になっていれば、それだけで独立した事態となる。通常、「空」というのは「地」であり、そこに飛ぶ「蝶」は一般的な認知では「図」に当たるのだが、それが終止形を伴う一つの独立的な動きとして認識されることになる。そのため、終止形では「蝶別る」とい

う事態そのものに焦点があたってしまい、「後に残った空」には焦点が当たらない。

しかし、「蝶別れ」というように連用形終止によって一部分化すれば、「あをあをと空を残して」というように「蝶が去った後の空」が描かれ、かつ、「地」であった「空」に改めて焦点を当てることができる。連用形によって終結するために、描かれる事態に後続部があることを示すという終わり方になり、「蝶」の動きだけに焦点を当てないようにすることができからである。カメラワークで言えば、カメラの焦点を蝶が飛び去った後の青空をしばらく捉え、それによって「空」が改めて焦点化されているとっていいだろうか。その意味で、この句において連用形終止によって「蝶」の動きを一連の動きの中の一部であるかのようにとらえることは、ゲシュタルト心理学でいうところの図と地の転換ともなっており、地であった「空」のあり方に焦点が当たることになっていたのである。

四 連用形連続による事態連続

連用形終結の一つの場合として、連用形が連続することを連用形連続と呼ぶことにしたい。次の詩では連用形連続という修辭が利用されている。

竹

萩原朔太郎

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、
根がしだいにほそらみ、
根の先より纖毛が生え、
かすかにけぶる纖毛が生え、
かすかにふるえ。

かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まつしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりと、

青空のもとに竹が生え、

竹、竹、竹が生え。

（『月に吠える』）

この詩の場合も、連用形終結があるが、それ以前の文も連用形によって述語が連続している。

ここでは、連用形連続が、「竹が生える」という動きが連続して続いていくというイメージを構成している。これは、最終部の「竹、竹、竹が生え」という名詞の並列も関連したものと言える。連用形連続に加えて終結部が連用形終結となることによって、この詩は終わりからさらに前へ戻れるというように、いわば円環性を持つことにもなっている。

この詩に隣接して配置されている萩原朔太郎「地面の底の病気の顔」も同様であるが、それ以外の詩人、例えば、草野心平の「窓」なども連用形連続の詩である。一箇所名詞で終止する部分があるが、波の寄せては返す動きの連続性を連用形連続によってイメージしている例と言える。

窓 草野心平（少し長いので改行を／として引用する）

波はよせ。／波はかへし。／波は古びた石垣をなめ。／
陽の照らないこの入江に。／波はよせ。／波はかへし。
／下駄や藁屑や。／油のすぢ。／波は古びた石垣をなめ。

／波はよせ。／波はかへし。／波はここから内海につづき。／外洋につづき。／はるか遠い外洋から。／波はよせ。／波はかへし。／波は涯しらぬ外洋にもどり。／雪や／翼や。／晴天や。／億万の年をつかれもなく。／波はよせ。／波はかへし。／波は古びた石垣をなめ。／愛や憎悪や悪徳の。／その鬱憤の暗い入江に。／波はよせ。／波はかへし。／波は古びた石垣をなめ。／みつめる潮の干満や。／みつめる世界のきのふやけふ。／ああ。／波はよせ。／波はかへし。／波は古びた石垣をなめ。こうした連用形連続が日本の口語詩の歴史の中でいつごろ生まれたのかは今後検討していきたい課題である。

五 名詞後置連用形

連用形終結とはテキストの終結部を連用形で終えるという表現であるが、連用形の後に名詞が位置するという構造もある。この用法を名詞後置連用形と呼びたいと思う。この場合も、用言の存在が暗示される点は同様である。例えば、

万智ちゃんを先生と呼ぶ子らがいて（φ）神奈川県立橋本高校（俵万智『サラダ記念日』）

においては、ゆの場所に様々な述語が考えられ、
呼ぶ子らがいて、そして、＋として（いて）、－として（い
て）・・・

というように連続性ができる。そのため、そこに想定される世界は様々な可能性を持つのである。さらに、その後名詞があることで、その名詞の属性を結果的に規定することになっている。これに対して、連体形による直接的な修飾の場合、「子らがいる○○高校」となれば、単に一つの述語だけで被修飾名詞の属性の規定をするに過ぎないことになる。

こうした連用形に名詞が後置された形は、

末枯れの陽よりも濃くてマツチの火
大野林火

など、よく見られ、この例では、「濃くて」の後に何らかの述語の存在が暗示される。

ただし、名詞後置連用形という形は同じでも、意味的な関係に注意すれば少しタイプが違うものもある。例えば、

結髪や鏡はなれて朝すずみ
鬼貫

鳴く猫に赤ん目をして手毬かな 一茶

などは、名詞といっても「朝すずみ」「手毬」といった動きに関連するもので、実際には「ゝする」という動きを修飾しているともみべきであろう。また、

七月の青嶺まぢかく熔鉦炉

山口誓子

わか柳一すぢのりて藁庇

阿波野青畝

などでは、「ゝがある」とでいつた述語が予想される。いわば、名詞がどういう状態で存在するかということを連用修飾で述べることになっている点で、多様な事態の存在を暗示するという機能とは少し質が違っている。ただし、それでも、例えば「七月の青嶺まぢかく熔鉦炉」とするとそういう属性を持つ名詞「熔鉦炉」そのものが取り上げられるのに対して、連用形によっていわば「ゝがある」という形になることで、その「存在のしかた」に焦点化が及ぶ。

このように、名詞後置連用形の用法には少なくとも三つの場合を認めておいたほうがよさそうである。

六 連用形による緩やかな因果関係

連用形による接続は因果関係を表示することができる。しかしその関係はさほど強くはない。そのため、一定の因果関係を表しつつ、理屈っぽい表現ともならない。例えば、

わたしと小鳥とすずと

金子みすず

わたしがりようてをひろげても
お空はちつとも飛べないが
とべる小鳥はわたしのよう
地面をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすつても、
きれいな音はでないけど
あの鳴るすずはわたしのよう
に
たくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんな違って、みんないい。

という詩における「みんな違って、みんないい」という接続関係はまさにこうした連用形の意味に対応するものと言える。

ただし、この例の場合、構造的にはどちらも「みんな」という名詞の後に助詞が省略されているので、並列関係とみる余地もある。その場合には、「みんな違う」「みんないい」と

いうことが当然のことであるかのように並列され、それが、「みんないい」という表現となつていとも見ることができ
る。

七 おわりに―日本語における詩的言語としての連用形利用

以上、連用形という形態の用法を概観し、極めて「あたりまえ」の活用形である連用形が重要な修辭的效果を持つということを述べてきた。連用形という形も様々な用法があり、その特性を日本語の韻文文学は積極的に利用してきたと言える。

萩原朔太郎は、日本語の詩的表現をめぐって、次のように述べている。

西洋の詩は、（日本語にないような音節構造などの韻律的エフェクトがあり―引用者注）本来その饒舌の中に魅力を持つので、言はばそのおしゃべりが長所である。……日本の詩人は、国語の宿命づけられた因果からして、本来おしゃべりが出来ないものである。（中略）即ち我々の詩人たちは、饒舌の代わりに沈黙を発見し、国語の特融ミヅな「てにをは」や、語義の漠然とした象徴性や、自由で

大胆な省略や暗示と連想に富む特質やから、世界に類なき特殊なボエジイを想像した。（萩原朔太郎『純正詩論』昭10）

この「沈黙を発見」、「自由で大胆な省略や暗示と連想に富む特質」といったことの一つは、例えばここで述べたような、連用形による後続部分の存在暗示といったことと無関係ではないであろう。

連用形などという活用形は学校文法の学習の中では、いわば無味乾燥な知識として教えられることがあるいは多いのかもしれない。しかし、このように、連用形を選ぶことで表現の味わいが深くなるということ自体は、国語教育の中でもっと強調されていいことのように思われる。

さらに、連用形という形が持つ意味を記述文法的に分析していくことも課題であるし、連用形相当の形態を持つ他の言語での文学的表現はどうなのか、といったことも興味深い課題である。森山（二〇〇二）でも述べたことであるが、詩的言語の特性を一般的記述文法の観点から検討していくということも、今後さらに試みていきたいと考えている。

注

(1) こうした音便の学習は国語科の文法の学習において、発見型の学習をする、言葉のもつ規則性についての学習となる点で有益であろう。

(2) 活用形の学習をする場合、教師側には説明するかどうかは別として、連用形命令に関する留意が必要である。連用形による命令文は日常会話でよく出現するからである。ただし、命令用法の「て」には「て頂戴」のほか「てくれ」に相当する用法もある。例えば谷底に落ちた人が「助けてー」「助けてくれー」とは言えるが、「誰か助けてちょうだい」と言うことはいささか考えにくい。待遇的な関係については別に考える必要がある。

(3) 「それでいて」という接続的な表現を介在させたが、この「それでいて」という形自体も連用形出自で並列的な関係が作れるということにも注目しておきたい。

(4) 連用形終止という言い方もできるが終止形と紛らわしいので「連用形終結」と呼ぶことにしたい。次に述べる「名詞後置連用形」も見方によっては「連用形終結」の一つの用法と考えられるが、ここでは区別する。また、今の段階では、後述の連用形連続も連用形終結の一つの場合として扱うが、連用形連続と連用形終結とは別に扱う方がいいという可能性もある。今後の検討課題とした。

参考文献

- 池上嘉彦 1992 『詩学と文化記号論』講談社学術文庫
萩原朔太郎 1983 『純正詩論』筑摩書房『萩原朔太郎全集 9巻』
仁田義雄 1995 『シテ形接続をめぐって』『複文の研究(上)』(仁田義

雄繩) くらしお出版

南不二男 1974 『現代日本語の構造』大修館書店

森山卓郎 2000 『ここからはじまる日本語文法』ひつじ書房

森山卓郎 2002 『表現を味わうための日本語文法』岩波書店

森山卓郎、矢澤真人、安部朋世 2011 『学校文法の『品詞』について』

『京都教育大学紀要』118

ストックウェル 2006 『認知詩学入門』(Cognitive Poetics: An Introduction

2002) 内田成子訳・鳳書房

(早稲田大学教授)